



緑のふるさと協力隊として昨年4月に鮫川村にやってきた飯塚ひろみさん。3月16日、無事1年間の任務を終え旅立ちました。広報さめがわでは、毎月「畑楽協力隊だより」と題して、彼女の鮫川村での体験記をご紹介します。今回、1年間の活動をまとめた報告書が完成しましたので、抜粋してご紹介します。彼女の目には鮫川村がどのように映ったのでしょうか。

はじめに

私は、特定非営利団体地球緑化センターの主宰する第12期緑のふるさと協力隊として1年間、福島県鮫川村で活動を行った。1年間の活動、生活を通して私が得たこと、考えたことを村に置いていくこともひとつの活動として、ここに自分なりにまとめたと思う。また、私の撮った鮫川村の写真の数々も添付資料として残していきたい。

私がこの一年で鮫川村に与えてもらったものは、今後の人生において大きな財産となるだろう。逆に、フルタイムボランティアといながら受け入れ先に援助して頂いている摩訶不思議な立場で、それも何も知らない学生上りの私が与えられるものは、感じたこと

を言葉にすることくらいである。まとまらないつたない内容になるが、何らかの事柄にし役立つことがあれば光栄に思う。

1 緑のふるさと協力隊という居場所 (1) 参加動機

私が、緑のふるさと協力隊を知ったのは大学3年生の時であった。農業、農村に興味のあるものを持っていて私は、インターネットや雑誌などさまざまな媒体から情報を収集していた。実家に世話になったり、インターンシップやアルバイトを利用したり、農家を紹介してもらうなどして農業を体験する場を得てきた。また、農村というフィールドに入り込みたく、滋賀県高島町の棚田オーナーにゼ

ミの先輩の誘いもあって参加し、定期的にむらに通い農村を身近に捉える努力をしてきた。しかし、自然体の農村に触れることは難しいことであった。少しでも棲みこまなければ、本当の農村を見たことにはならないと感じていたときに、インターネットでこの事業を知る。卒業後の数年間は、農業、または農村に直接触れることを決意しており、※1「WWOOF」や※2「ポラバイト」、あるいは農業研修などを進路候補にあげていたが、資金面の問題とそれ以上にある限られた農家に受け入れてもらうのではなく、農村という地域に触れたかったため、協力隊の条件は私の希望と合致し、迷わず参加を決めた。

(2) 私の持つ危機感

なぜ私が一定の農家ではなく地域に触れることにこだわるかと言えば、より多くのお年寄りや接したいからである。私は、同居していた大正生まれの祖父父母の間で幼少期を過ごし、さまざまなことを教えられた。その祖父父母が亡くなり、私を可愛がってくれた祖父父母の友人らも亡くなつていき、区画整理や時代の流れによって周辺の田畑が住宅地に変わっていく有様も見てきた。戦争を知っていた祖父父母から、昔の話を聞くことはすでに不可能であるし、コンクリートで打ち固められた田んぼが、田んぼに戻ることはない。特に、自分と接点の強い家の目の前の田んぼが、私が中学2年生の時にアパートに姿を変えたシヨックは大きかった。先祖代々耕され守られてきた田、そして自分を育てたフィールドを失つ

た喪失感。一度失われたのを、この時代の流れのなか取り戻すことは容易でないことを強く感じ、強い危機感を覚えた。

昔の暮らしを知る人間は、あと何年かしたらいなくなってしまう。揺るぎない事実である。焦りを感じた私は、後回しには出来ない而就職よりも先にこの道を選んだのである。日本全体が文化伝承のタイムリミットを迎えようとしていることに、どれだけの人が気づいていくかという不安もあり、自分だけでなく、より多くの人にそこに気がついてもらいたいという願いも持ち合わせている。

住居を用意して頂けるといことは、入り込みにくい農村に入っていくには大変重要なポイントでもあった。「田舎暮らしは金がかかる」というのは現実で、住み始めてしまえばテレビに出ているように生活費はかからないが、住み始めるにはハードルが高いというのが農村に興味を持つ若者から中高年まで誰もが持つ共通の認識であるだろう。受け皿さえあれば、手厚いサポートがなくとも足を運ぶ人は少なくない。現にお金を目的としない「WWOOF」やポラバイトに参加する人が大勢いる。ほしいのは「居場所」なのである。そして私は、協力隊という「居場所」を得て鮫川村にやってきた。

に向かう42人の仲間がいることは励みでもあり、これは一年を通して支えになってきたと言える。磐城塙駅まで道中を共にしたコグ(埧町隊員:小葉正志)を車中から見送った後の二駅の間は少しばかり緊張が高まり、ドキドキしながら駅に降り立ち改札を出ると、村の担当者の方が待っていた。駅を出発し、まもなく車は長い上り坂に入り、鮫川村の標識が現れると程なく視界が開け田畑や家々が見えた。高い山が周囲にそびえた谷底にあるような村だった。という不安を少しばかり抱いていたのですが安心したのを覚えている。また、杉や檜の人工林、または竹で覆われた山ばかりを見て育った私にとって「枯れているのではないか」と真剣に疑うほどである。本来の山の姿を知らずに22年間生きて

きてしまっていたことは、現代社会の実像とも言えるだろう。生活している場によつては、山を知る機会がない。山を見に行くとしても、新緑、紅葉といったシーズンの場合が多く、オフシーズンの山を見ることがない人というのは実際のところほとんどかもしれない。

(2) 山奥ではない村

数日間、担当の方に案内され村内を見て歩くうちにおおよその村の特性をつかめたように思う。鮫川村は、村全体が里山体系をしており、村のどこを歩いても人が住んでいる気が配がした。山奥と言うというよりは、山の上にいる、または山の中というイメージであるが、明るい景色のイメージが強い。

村には、大字が7つあり、175の小字がある。「いえ」の集まりである「むら」という社会が、いくつも存在して成り立っている「村」といえるだろう。また、見事に村境から下り坂になることから、阿武隈山系の頂上部に位置する村ということがはつきりとわかる。同時に小さなむらむらも、それぞれが地形に沿った集落を形成しており、村が自然形態を軸に構築されてきたことがうかがえる。

(3) 村の農業 (循環の見える形)

村の主幹産業は農業であるが、そのほとんどが兼業であり、また和牛を飼う家※3をよく見かけ、少量多品目の自給型農業が主であるとみえた。農政からしてみれば、金にならない農業である。しかし、大規模単作農業の盛んな「産地」ではないことが私にとっては

2 鮫川村の印象 (1) 村に来た日 4月11日、研修地川崎から電車を乗り継ぎ、水郡線棚倉駅までの間、車窓を見ながらこれから暮らすところはどんなところだろうとわくわくしていた。同じ日に、同じように各地



※1 1970年代に英国で始まり、日本では2002年に本格的な活動が始まった。各国に1カ所ずつ事務局があり登録した有機農家と、そこでの作業希望者とを取り持つ橋渡しの役割を担っている。働きたい人たちがウーファー(WWOOFer)、受け入れる側をホストと呼び、世界各地の有機農場で働けるシステムである。労働力と食事と宿の引き換えというシンプルなかたち(食事・宿泊場所=労働力)で、ホストにより1、2日や1週間程度の短いものから、数カ月、半年以上と長期を望む所、ケースバイケースなど作業内容もさまざま。WWOOF JAPAN <http://www.woofjapan.com/japanese/index-j.shtml>

※2 ボランティアとアルバイトを組み合わせた造語であり、サンカネットワークという組織が立ち上げ、お金を一番の目的とせず、経験したことのない仕事や地方の人たちとふれあうことを目的として、農家での農繁期、宿泊施設でのハイシーズンなど、地方で人手を必要としている時期に手伝いに行くとこのシステムである。日帰りから住み込みまで、受け入れ先によってさまざまな形態がある。ポラバイト、コム <http://www.volubeit.com/>

※3 村全体の頭数は220戸で2,430頭。10頭以下が約150戸。

※4 ほとんどが麦の飯だが米の方が比重が重いので、底の方は白い飯になるそう。親は麦ばかり食べることになるが、黙って見過ごしてくれていたという。

※5 熊本県水俣市において吉本哲郎氏を中心に「水俣にはいろんな人たちが調べに来てくれたけど、住んでいる私たちは詳しくならなかった。結局調べた人が詳しくならない、下手でもいいから自分たちで調べよう」と、みんなで「水のゆくえ」や「あるもの探し」をやってきて、地元で学ぶ「地元学」と名づけられた地域再発見をしていく活動。その動きは全国各地に広まり、地元学をすることにより「ないものねだり」でだめと決めつけていた自分の地域に自信と誇りを持つと同時に、活かせるものを知り、それを活用して地域活性化をはかり成功している事例も少なくない。同時期、結城登美雄氏により東北地方でも同じような動きがうまれていた。足元の当たり前の豊かさに気づく地元学 <http://www.ruralnet.or.jp/syutyo/2001/200104.htm>



でもらっているが、その項目欄は30までしかなく、いっぱい記入できる人はほとんどいない。しかし、出し始めてみるとみな30以上ものを出荷していくことになる。自分がどれだけのものを生産する力を持っているのか把握できていないのだ。しかし、生産者の手からはあらゆるものが生み出されていく。そして、出荷したものが売れるという目に見える形で表れる成果を励みに、試行錯誤をはじめ、その生産力の幅はより広がりをみせていているように思う。

その生産力の根本はあくまで「自給」の延長である。「儲ける」ことが第一目的でないこ

3 地域の宝 あるもの探して見えたもの  
 (1)豆で達者な村づくり (村を支えるお年寄り)  
 (2)の(3)であげたように鮫川村において主たる農業を担うのは、家族の食糧分の畑を耕す高齢者と言っても過言ではない。その高齢者を主役から行われているのが「豆で達者な村づくり」事業である。高齢者に大豆、

幸運であった。決して、そういった農業を否定しているわけではないが、有畜自給型農業は循環型農業のモデルであると同時に、文化が必ず垣間見られると思ったからである。  
 産地指定された地域では、それによって安定した収入と活性化が見込まれるが、同時に伝統的な農法が見失われたり、農家自身が消費者になってしまったりする。また、自分の作った作物を食べたくないと思うほど農業や化学肥料を多投していることもあると聞く。そういったものを消費者は口にしている。これは、農業が完全に利益を得るための産業として扱われている結果であるだろう。  
 逆に自給型農業では、自分たちが口にすることが目的であるために、なによりも安心で安全であると言えるだろう。それに加え有畜であることが、畦畔の野草や作物の残処理になり、またその堆肥が田畑に投入されることで化学肥料の施用を抑えることが可能になる。自分の家に和牛がいなくとも、地域の有畜農家と互いに、糞や野草と堆肥を交換するなどすることによって、地域での有機物の循環が存在している。このことにより、村の景観が保全されていることも事実であろう。

またはじゅうねん(エゴマ)の栽培を奨励し、出来た作物は村が全量買い上げ、それを使って特産品を開発するとともに、大豆・じゅうねんを食べて元気になろうという試みである。  
 私は、活動としてこの大豆生産者から栽培状況を聞いてまわることをさせていた。地図と名簿を持ってバイクで村中を走り回ることにより、私自身が村について詳しくなると同時に、多くの方に私の存在を知ってもらう結果となった。100人を超えるお年寄りとの会話の機会を得て、尊い時間を与えられたと思っっている。大豆栽培については、みな自分の手で出来る範囲であり、ほとんどが1反歩以下の栽培面積である。それにより除草剤を使わず、夏の盛り3日かけて草を取ったなどと言う人も少なくなかった。彼らは、本当によく働く。「村のために」と語る方も多く、実際に村を支えているのはこの人たちであるだろうという思いが強くなった。  
 自分たちを主軸に(本人たちにその意識はあまりないが)村づくりがすすめられるということ、自分たちの活躍の場が出来ることで、実際に生きがいになっているようだ。年寄り同士の会話にはよく大豆やじゅうねんの話題があがるという。そして、自分たちの作った豆から豆腐や味噌が作られ、それを食べる喜びを得て



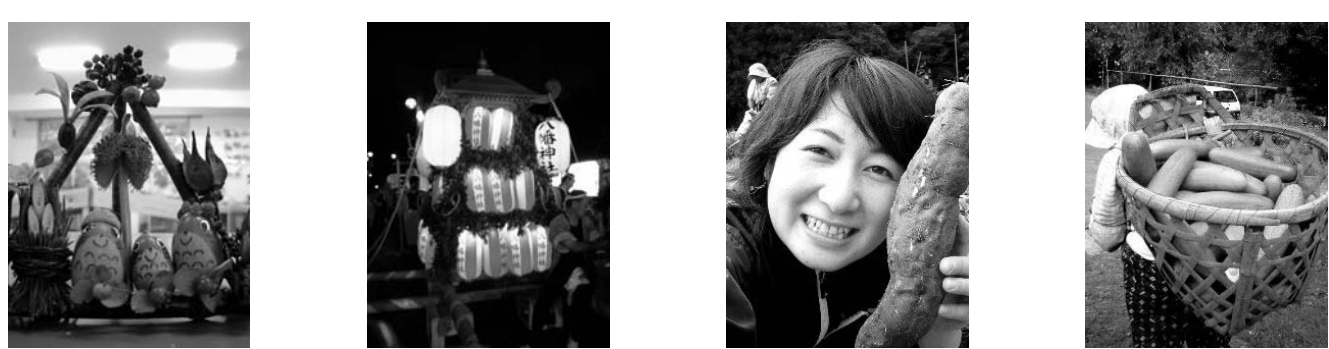
とが、消費者にとっても、安心できる結果を生み出すと言えるだろう。年金で暮らすお年寄りにとっては月に2、3万円の収入であったも「小遣いには充分すぎる」という程だ。金を得る予定ではなかったものが集められて売上げが出ると言うことは、これまで眠っていたここにあるものを生かしているという、紛れもない事実である。  
 「鮫川はどこのうちも野菜を作っているから買う人はいない」そう踏んでいた人も多いだろうが、ならば鮫川の人が村外のスーパーマーケットで買い物しないかと言えばそうではない。もちろん、野菜以外のものの購入に足を運ぶ必要性はあるだろうが、若い世代については畑に野菜があっても買う人が多いという。それならばせめて、村内産の顔の見える関係、そしてフードマイルの近い食を求めざるべきであろう。それには直売所は有効である。

また、直売所の利点として、基本的には旬のものが並ぶため食育の場ともなり得る。冬季はやはり青物が不足する傾向があるが、だからだめだと決めつけず特色と捉えるべきである。そう捉えるしかない部分もあるが、この地に暮らした先祖は本当に作物が収穫できない状態にあり、それでも命をつないできた。作物の収穫できない冬季を見越して、年間を通しての食糧を生産貯蔵する知恵を養い伝えてきたのではないだろうか。飽食の時代、金でなんでも手に入るがために失われた感覚、「貴重な食糧」というものを知ることが出来る機会になるよう、そう学べるように仕向けていくことも可能であると思う。例えば小学校と連携して、小学生に冬の保



て、理想の循環が見えてきている。  
 (2)「手・まめ・館」は地域資源を生かす場  
 「豆で達者な村づくり」の一環として、その拠点となる直売所「手・まめ・館」が11月6日にオープンした。この直売所については村内でも意見が分かれていたようだ。否定的な意見は確かに多く聞いた。しかし、11月からの活動でこの直売所の店頭に立ち、その様子を見てきて、村外からの客層は多く、活気づく生産者が増えていると思う。  
 「手・まめ・館」には、鮫川村で生産されたものだけが並ぶ。お年寄りが作った大豆を原料としたきな粉や豆腐などの看板商品ははじめ、野菜はもちろん、果物、加工品、漬物、保存食、工芸品、手芸品などなど。その種類は100を優に超える。生産者には登録の際、年間を通して出荷できると予想できる品名を記入し

とが、消費者にとっても、安心できる結果を生み出すと云えるだろう。年金で暮らすお年寄りにとっては月に2、3万円の収入であったも「小遣いには充分すぎる」という程だ。金を得る予定ではなかったものが集められて売上げが出ると言うことは、これまで眠っていたここにあるものを生かしているという、紛れもない事実である。  
 「鮫川はどこのうちも野菜を作っているから買う人はいない」そう踏んでいた人も多いだろうが、ならば鮫川の人が村外のスーパーマーケットで買い物しないかと言えばそうではない。もちろん、野菜以外のものの購入に足を運ぶ必要性はあるだろうが、若い世代については畑に野菜があっても買う人が多いという。それならばせめて、村内産の顔の見える関係、そしてフードマイルの近い食を求めざるべきであろう。それには直売所は有効である。  
 (3) お年寄りから学んだこと  
 一年間の活動の中で、多くのお年寄りと接する機会を得た。人生の大先輩の話の中からは、本当に学ぶことが多かった。動力やハイテク機器などなかった時代に、頼るのは自然と自分たちの労働力のみで生き抜いてきたお年寄りたちからは強さと、温かさ、心の大きさが、優しさを感じた。目まぐるしく変動する社会の中で、それに敏感になることも必要だが、動じないことも必要である。お年寄りの暮らしは、食糧危機が万が一起こってもびくともしないだろう。ある87歳の男性が「機械には頼ってられない。身体さえあれば、種一粒から何倍にもなる」と言っていた。  
 私たちの世代は「苦労」を知らない。何が「裕福」かもわからない。私自身、大学で学ぶために多少の苦労をしたつもりだったが、大学で学ぶという贅沢をするための苦労など、苦労とは呼ばないかもしれない。そうしなければ生きていけない「苦労」は、私には計り知れない。72

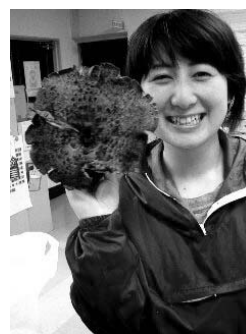




「手・まめ・館」には、緑のふるさと協働隊公開報告会(3/18~19に東京都で実施)の際に発表した鮫川村を紹介するパネルが掲示されていますのでご覧ください。

農村は今、流行の中の利益に利用される可能性もある。過疎の進む村に人が来てくれれば、「ありがたい」という気持ちを持つのは自然のこと

村づくりが現在進行形で行われているが、村



とももう居なかった。時はすでに遅かったが、両親も多くのものを持っていることに気づいた。聞けば、知らなかった事実が次々と出てくる。母方の祖母にもよく話を聞くようになり、やはりさまざまなことを教えてくれる存在であった。気づくまでにしても時間がかかってしまうことかもしれないが、そういう存在が近くにいることは、それだけで幸せに思わなければならない。鮫川村には、多くの知恵が生きている。それを生かしていくためには、今より多くの人がお年寄りに耳を傾ける必要があるであろう。お年寄りは、村の宝である。

#### 4 村のゆくえ 誰の村なのか

##### (1) 村とは一体何なのか

「村の生き残り」とはよく聞く言葉だが「村が生き残り」もしくは「村の存続」とは一体どういうことなのか。人口がそれなりに増えれば村は存続するのか。財政の問題か。村の存続には、合併の問題がよく取り沙汰されるが合併して村の名がなくなったからといって、村が消えるわけではない。結局、「村」と一言で言うが、多面的側面を持っており、そこにはあるひとつの社会が形成されていて、その

「むら社会」の存続こそが「村の存続」と位置づけられるのではないだろうか。もちろんそれは、人口の問題にも直結するし、田畑の耕作、村の経済に結ぶ関わっていくことになる。農村社会学という学問の分野があるが、論理的に考えるにあたってはもちろんそれを学ぶことも大事かもしれない。けれど、重要なのはそこで暮らしが営まれているということ。集落の慣わしや、集まり、講、結いの精神も残っているだろう。自分の「家」だけでそこに暮らしているわけではないのが「村」であると思えば、その暮らしが守られてこそ、守られる未来が見えてこそ「村が生き残り」と言えるのではないか。

その基盤があつて村の活性化をすすめられると考えられる。それには、自分自身(個々)が村の住人であるという認識が必要である。自分の住む地域のことをいかに知っているか。いかに教えているか。自分が生かされているフィールドを知ること何よりも大切なことである。ところで「村づくり」の意識が若い世代にどれだけあるのかは疑問である。同時に、伝えるべきことの伝承がなされていないことがうかがえる。それというのも、私が大豆生産者の各家を回ってお年寄りとお話をしたとき、みなさま

まなことを話してくれた。それを自分の孫に話したかと言え、きつとほとんど話をしていないだろう。色々聞いて、耳を傾ける私に皆驚きながら喜んでくれた。今時こういう子はいない」と何度も言われた。しかし、「こういう子」と言われる私を作り出したのは、祖父の影響が非常に大きい。子や孫を育てるのは、親や祖父祖母または地域の大人たちである。結局は自分たちが未来を左右しているのは紛れもない事実ではないだろうか。まずは、自分の家族に語りかけることが大切であると思う。村の良さを家族同士で認識しあうことが、外への発信の前に最も重要になるはずだ。足を固めなくては、外への発信はできないはずである。

##### (2) 利用する立場への転換

スローライフ、スローフードなどという言葉がはやる昨今、団塊の世代の退職も目前に、農村が注目されてきている。グリーン・ツーリズムという言葉もはや珍しくはない。大手旅行代理店でさえ、田舎ツアーを組んだりする。けれど、都会に住むものが人の行き来に関わる場合、地域に還元される利益(金銭面だけを指すものでない)は必ずしも多くはない。

農村は今、流行の中の利益に利用

される可能性もある。過疎の進む村

に人が来てくれれば、「ありがたい」という気持ちを持つのは自然のこと

だろう。けれど、村に来る人の方が、与えられているものは大きいはずだ。人の良い村人は、なんでも提供する。それは知識であったり、もてなしであったり、気持ちであったり。しかし、与えてばかりではおもしろくないだろう。提供することで、自分たちにも変化を起すことが必要だとも思う。

今後、ますます都市住民の足が農村部にむかうことは多くなることが予想される。来てくれるお客様や新住民に感謝をすることも、よそからの風を上手に利用する手立てを考えたい。すでに各地ではさまざまなオーナー制度や体験プログラムが構築され、言い方は悪いが都市住民を利用して、田畑の保全が行われている。来てくれている存在でありながら、仕事をせらう。けれど、相手方の目的もその作業である。農村で何を求めるかといえ、その多くは癒しかもしれない。癒しとは、ただ自然を眺めてぼーっとすることではなく、都市住民にすれば汗をかくことも癒しなのである。空調がいつでも完備された空間に暮らす人間にとって、汗をかくことはそれだけで新鮮だ。村にくるものには、汗をかかせてあげてほしい。それは、きつと村にとっても利益になると思う。

そして、重要なのは、村が主体的立場に立つことだ。縁(えん)を大事にしつつ、自分たちで自分たちの方向性をきちんと提示して

いってほしいと願う。

(3) 村をつくるのは誰か(原点への立ち回り)



づくりは役場がするものではないのは、当然のことである。だが、現状では行政主導型のように見える。村をつくるのは誰か。それはそこに住む本人たちである。住みよい環境は人がつくってくれるものではない。その認識をもっと広く持つてもらう必要があるのではないだろうか。そして、その気になってもらわなければならない。「地域づくり」とは「人づくり」だとも言われる。結局、中心になるのは人であるということだろう。

こうやって、まともにはないが報告書を書いていく私の頭の中には、言葉にまとめきれない知識や感情が溢れている。この一年分だけでも膨大な量である。どうあがいても伝えきれない。

そして、こうやって間接的に伝えたと入らない。他人事でおわりやすい。結局は自分自身で聞いたり調べたりしていく必要があるのだ。「調べた人しか詳しくならない」。大学時代に言われ、私が痛感していることだ。体験も同じく「体験した人にしかわからない」。結局はなんでも、自分でやってみなければいけない。

実際にわかっている事実であろうとも、もう一度改めて自分で調べなおすことによつて、他人事が私事にかわる。それは「地元学」※5の手法である。いま、地元学は農村だけでなく「当たり前」の生活に浸り心の闇を抱える日本にとつて、誰しもに必要なことだと私は思う。大学時代に地元学を学びながら「地元学とは結局何なのか」と学んでいる皆がその答えを模索していた。そして私が見つけた答えは「生かされている自分に気づくこと。」そしてそれを活かしていくこと。ないものねだりばかりをして、いまここにあるものを否定していったところで、ここにあるもので生きていくのは事実である。ここにあるものがなくては生きていけない。そしてそれが大事なものであることに気づくことが大切である気がする。私自身も、何も無いと思つていた地元を見直すことで、どこにも負けない最高の場所だと思えるようになった背景がある。地元を自分で調べて知ることにより、地元に対する思

いが増し、興味を持てた。若い世代には特に意外と知らない地元について、改めて調べる機会を持つてほしいと思う。

## 5 若者からの提言

### (1) 農山村に向かう人々がむかう先は魅力ある場所

ここ数年、農業に興味を持つ若者が増えていく。私自身もそうだが、自分だけではないことがそのことにより自信を持たせている。農業について興味を持つことはもはや、珍しいことではなくなつてきている事実をつかんでいきたい。しかし、それは産業的な「農業」ではなく「生き方」としての農業であることも理解してほしい。つまり、自給型の農業である。自給型というのは、自給自足という意味ではなく、もちろんその先に取り引きはあるがあくまで自分で食べるということが基本になる。

どこをむいても第一に「お金」になつてしまふ世の中に答えを見出せない、未来を感じない人が増えている。「金」がなければ生きていけないのは事実だが、自分では何もできないことに気づくとなんととも言えない空虚感を感じる。世の中に起こるさまざまな問題の解決先に行く末が農村にあるとみな感じているのだ。農村という空間が、新しい生き方のフィールドになろうとしている。しかし、どこでもいいわけではない。より魅力ある場所を求めて探し歩いている。魅力ある場所とは、魅力ある人のいる場所である。

生き方としての農業を求めることは、現代社会にそぐわない夢かもしれない。しかし、

夢は失いたくない。都市には夢や希望は少なく、生きる活力を失った人たちが大勢いる。そんな中、夢を持った人が大勢いればより魅力ある空間となるだろう。農村の未来にも夢を持つてほしいと思う。

## (2) オルタナティブな生き方を求める世代 新しい価値観の認知を

物質的な豊かさを得ている私たちの世代は、行き詰つている。戦前世代は、生きること必死になり、高度経済成長世代は豊かになることに必死になっていた。そして、その次の世代の私たちには課題ばかりが残つていくように思えてしまう。ものではない豊かさを探しているのだ。個性を認められず、学校に行き、就職してという決められた道にさえ疑問をいだけるようになった。それも豊かさのひとつかもしれない。生き方を選択できる時代がきているのだ。だからこそ、生き方は選択するべきだと思う。これまでの金が第一の生き方からの解放を望む、オルタナティブ(既存のものに取って代わる新しいもの)な生き方を理解してほしい。

問題ばかりが情報社会を駆け巡る中、目の前の問題を解決していくには生き方の根本を見直す必要がある。人間中心主義の競争社会こそが社会の歪みを生んでいるとは思わないだろうか。あたらしい価値観をそろそろ生み出さなければならぬ。

農村には、時代は変わつても過去から変わらないものが数多く残っている。そこに希望が見えるのだ。目まぐるしく変化する社会の中で変わらぬものを求めている。そのひとつが、お

年寄りの持つ強さだ。まだまだ説得力は足りないが、オルタナティブな生き方を求めて若者は模索している。これからの社会を生きる世代の夢が農村社会にあることに自信を持つてもらいたい。これは、私一人の考えではなく、実際に本場に多くの若者が抱えていることである。その価値観の認知をまずはしてもらいたい。そして、その夢の懐である農村には、都市と比較して「ないものねだり」をするのではなく、その特性をいかした地域づくりをしてほしいと願つているのだ。そして、それに参加させてもらえる門戸をつくつてほしい。

## ■ おわりに

一年間、学生上りの何もわかつていない生意気な私を大きな懐で受け止めてくださった鮫川村に本当に感謝している。そして、農山村に未来の希望を覚えたのは紛れもない事実である。否定的な意見もよく聞いたが、それは魅力を失わせてしまうこと以外にならぬ。農山村が輝くことは、日本の未来であると思う。大きなことではなく、日本の食、命を背負っていることにも自負してもらいたい。

鮫川村を一年で出ていくことを残念に思つてもらえることを大変光栄に思う。しかしながら、この一年で私のふるさとを思う気持ち強くなった。ふるさとを



大事にする気持ち、親が子を思う気持ちなども学ばせてもらった。定住しなかったことを悲観的に捉えず、身勝手ではあるが、一人の人間を大きく成長させた前向きに捉えてほしい。

私も自分が「生かされている存在」であることを強く感じられるようになった。大学生になると、二度と静岡には帰らない気持ちで家を出た。「生かされている」ことなど微塵も考えられなかったからである。多くの人に会い、多くの経験をし、大事なものをみつけられた。それでもまだ何かを捜し求めることは贅沢ではあるが、私の選択である。農村に向かう若者が今後も増えていくよう、それを私のライフワークとして生きたい。

鮫川村とのご縁を今後も大事に、精進していきたい。一年で別れではなく、これからもぜひ村づくりには離れた地にいっても協力していきたいと思つている。

本当に一年間ありがとうございました。

